

空手道詳説（3）

第 1 章 空手道の歴史

2 中国における拳法と書物

(1) 嵩山少林寺と拳法

嵩山少林寺は、中国の河南省鄭州市登封にある中岳嵩山のうち少室山北麓にある寺院で、AC496年に北朝北魏の第7代皇帝の孝文帝（467～99年）が西域（中国人が西方にある国々を呼んだ総称）沙門（修行僧）の仏陀禅師を開基として建立された。

その後、伝記によれば南インドのタミル系パッラヴァ朝において国王の第三王子として生まれ、インド仏教第28祖の菩提達磨（ボーディダルマ）が527年頃に中国に来て北上し、嵩山少林寺に掛錫（僧が行脚の途中寺院にとどまり、僧堂に籍を置いて修業すること）し、壁に向かって9年間座禅していたところで、達磨によって中国に禅の教えは広まり、達磨が中国禅の初祖とされている。

達磨については、その実在性に諸説あって、伝記などその全てを信じる訳にはいかない。達磨は禅の教えばかりでなく、中国における拳法の始祖として伝わるが確たる証左は得られない。但し、達磨か、あるいは西域渡来の僧がもたらした手足技（拳法）、棍法（棒術）、僧が持ち歩く錫杖（しゃくじょう）術など、少林寺の中に禅仏教と共に伝え残された可能性は確かなようである。

ただ、仏教と武術に関しては、この嵩山少林寺だけで行われていたと考えるのは誤りで、むしろ僧侶たちの健康保持と護身術として各地方で仏道修業の側面として行われていたとする方が正しいかもしれない。武術は、修業や布教で広大無辺を旅することの多い僧たちは、自ら身を守る術は欠かせない防衛手段の一つとして、その必要性は容易に想像できる。

一つの見方として、達磨以前の拳法を「原始的組織体系化の時代」とし、その後を「体系的発展の時代」と区別できる≪「精説沖繩空手道」、発行：上地流空手道教会、発刊昭和52年（1977年）。監修・上地完英、編集主任・高宮城繁。P103）という説もある。

実際に、鎌倉武士の礼法や死生観に影響を与えた人物に、正安元年（1294年）に渡来した一山一寧（1247～1317年）は臨済禅の僧であるが、後に日本武術の流祖となった人たちの中には、鎌倉の禅寺における仏道修業において、一山一寧他の僧から武術の秘法を伝授されたと語った言い伝えがあるので、臨済宗と言わず禅仏教には、仏道以外に護身術を学ぶ課程が組み込まれていた可能性は否定できない。但し、現在の禅宗各派にその痕跡はない。

明（みん、1368～1644年）の代になって、嵩山少林寺において武術が練習されていたことは幾つかの資料に記録されている。この嵩山少林寺とは別に、かつて中国南部の福建省に南少林寺（福建少林寺）が存在したとされ、南少林寺を起源とする武術は南派少林拳と呼ばれている。しかし、南少林寺は伝説上の存在でないかとする説もあって定かでない。

「嵩山少林拳」は、現在に伝わるものとして、一部重複もあるが次の系統が挙げられる。これらは空手道にどのよいに影響を及ぼしたかなど、考究したい課題は多い。

◎嵩山少林寺とその近郊に伝わる武術

小洪拳・大洪拳・羅漢拳・梅花拳・朝陽拳・通背拳・連環拳など。

◎北派少林拳を源流とする武術

北派螻蛄拳・燕青拳・鷹爪翻子拳・猴拳・梅花拳など。

◎南派少林拳を源流とする武術

白鶴拳・洪家拳・詠春拳・蔡李佛など。



現在の嵩山少林寺雪景色

日本では、「少林拳」と「少林寺拳法」は同様かと混同して考えられることがある。「少林寺拳法」は太平洋戦争終戦（1945年）以降に、宗道臣（1911～80年）によって国内で創始されたものあって、嵩山少林寺の武術と同一視はできない。「少林寺拳法」は「嵩山少林拳」の流れをくむ梅花拳と深く関わる義和拳を基として体系化された拳法である。

少林拳（少林武術）を題材とした映画なども多いが、その一場面である。



(2) 中国における武術書

空手道に特に影響を与えたと思われる明代の双璧をなす著名な書がある。はたして、どのように反映されたものかどうか、一考の価値がある。古きを尋ね今を見つめ直すことや、残された数々の中国拳法を深く理解する必要性と、私の信条とする『空手道は、人間性をつくる土台となる一つの教養である』という見地からも意に止めていただければ幸いである。

1) 紀效新書

中国には、古典となる兵法書の中で抜きん出た存在として、「孫子」（BC403～221）や「呉氏」（春秋時代 BC 770～22）の兵法書がある。それと比肩しうる名著として評価が高いのが「紀效新書」（きこうしんしょ）である。

この書は、明代中期末の武将であった戚継光（せき けいこう、1528～88年）によって撰された兵法書で、1560年に発刊された。

戚継光は、倭寇（13世紀から16世紀にかけて、朝鮮半島、中国大陸沿岸部や東アジア諸地域を舞台に跳梁跋扈し、凶暴と恐れられた海賊集団である。初期は日本人が主だったので「倭」の字を冠したが、この時代は中国人である）、並びにモンゴル軍と戦い、ともに戦果を挙げたことで名を知られる。こうした武歴から重用されるが、晩年は妬む者から弾劾されて失脚し、失意のうちに世を去る。他にも「練兵実紀」などの兵学書を残している。

日本においても、江戸時代の儒学者・荻生徂徠（1666～1728年）が「紀效新書」を高く評価しており、他にも広く知識階級や軍師たちに読まれていた。

内容は簡明明快に書かれ、戦略、武器及び徒手での格闘、兵員の選抜、訓練、武器、陣法、軍律、行軍、旅営、兵法など多方面に及ぶ18篇からなり、棍法は12篇に、拳法は14篇にあって、宗太祖三十二勢長拳と呼ばれる武術図版をもって解説している。勢とは、姿や有様を示す意味である。

「紀效新書」の三十二勢長拳は、明代末期から清代初期にかけて創始された「太極拳」の中に、二十九勢が継承保存されている。

当然のこと、沖縄の手（ティー。空手技をいう）をする人たちが「紀效新書」を見逃すはずはない。

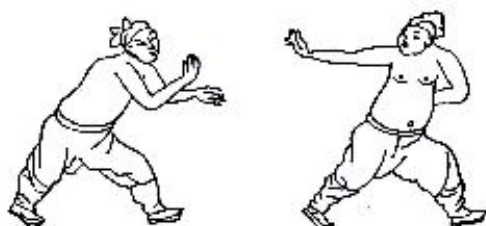
以下は、「精説沖縄空手道」に掲載されている中から、その一部を転載した。スキャナーの性能が悪く文字は読み難いうえに、私は漢文の知識に乏しく解説を加えることできないこと、平に容赦していただきたい。

拋架子，搶步披掛補上腿。那怕他
識右橫左採，快如飛架，一掌不知
天地。

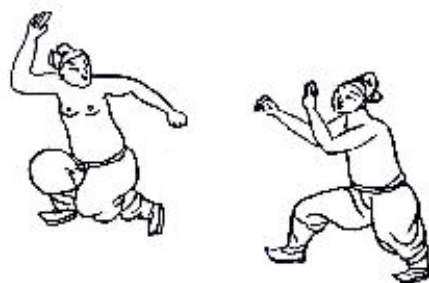
拈肘勢，防他弄腿。我截短須認高
低。劈打推壓要皆依，切勿手脚忙
急。



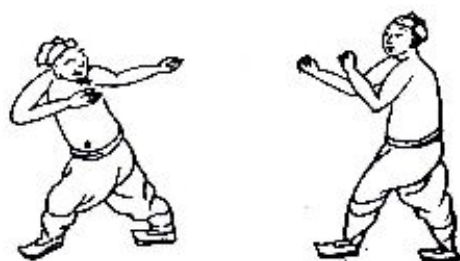
一霎步隨機應變，左右腿衝敵連珠。
恁伊勢固手風雷，怎當我閃驚巧取。
擒拿勢，封腳套子左右壓，一如四
平直來拳，遂我投活，恁腿不得通
融。



中四平勢，實推固硬攻進快腿。難
來雙手逼他，單手短打，以熟為乖。
伏虎勢，側身弄腿，但來撲我前撐。
看他立站不穩，後掃一跌分明。



七星拳手足相顧，挨步逼上下隄籠。
饒君手快脚如風，我自有攪衝勢重。
到騎龍，詐輪佯走誘逼人，遂我回
衝，恁伊力猛硬來攻，怎當我連珠
砲動。



拋架子，搶步披掛補上腿，那怕他
識右橫左採，快如飛架，一掌不知
天地，



拈肘勢，防他弄腿，我截短須認高
低，劈打推壓要皆依，切勿手脚忙
急，

一霎步隨機應變，左右腿衝敵連珠，
恁伊勢固手風雷，怎當我閃驚巧取，
擒拿勢，封脚套子左右壓，一如四
平直來拳，遂我投活，恁腿不得通
融，



中四平勢，實推固硬攻進快腿，難
來雙手逼他，單手短打，以熟為乖，
伏虎勢，側身弄腿，但來湊我前撐，
看他立站不穩，後掃一跌分明，



七星拳手足相顧，挨步逼上下隄籠，
饒君手快脚如風，我自有攪衝劈重，
到騎龍，詐輪佯走誘逼人，遂我回
衝，恁伊力猛硬來攻，怎當我連珠
砲動，



2) 武備誌

「武備誌」は前項の「紀效新書」と並び称される明代末の総合兵法書で、撰者は茅元儀（ぼう げんぎ、1594年-1640年）である。

茅元儀は軍学者で、この「武備誌」は1621年に出版されたから、「紀效新書」より60年ほど遅れたことになる。茅元儀が「武備誌」を編纂した動機として、当時の軍備や強兵の備えが衰えたことを憂いたからという。

茅元儀は、福建省の高官だった祖父の影響により、幼少時から兵や軍に関する故実に興味を抱いていたという。この「武備誌」を書くに当たり二千余種の書物を資料として、15カ年の歳月を費やして完成させた。

「武備誌」は、5部240巻からなり、次の5部門による構成となっている。

- ① 「兵訣評」18巻 「孫子」「呉子」など過去の兵書の要点と評論
- ② 「戦略考」33巻 春秋から元代までの膨大な戦争の実例を挙げての戦略論
- ③ 「陣練制」41巻 布陣と実戦的訓練について
- ④ 「軍資乗」55巻 營、戦、攻、守、水、火、餉、馬の八項目から軍事技術、兵器、築城など
- ⑤ 「占度載」93巻 天文気象とト占について

この本が出版された24年後の1644年には、明が滅び清国が成立するという激動期であった。

また、拳や棍に関する部分は、ほとんどが「紀效新書」を参考に引用しているので、いかに「紀效新書」は偉大であったか理解できると思う。

拳法の技術32勢のうち24勢が同じなので、ここでは図版の掲載は省略する。

3) 沖縄伝武備誌

沖縄には、「沖縄伝武備誌」という書物が残されている。前出の「精説沖縄空手道」（P223）によれば、原本は、明治8年（1875年）頃に福州に渡り3年間拳法を学び帰った東恩納寛量（1853～1915年）の高弟で、剛柔流を最初に名乗った宮城長順（1888～1953年）が、大正4年（1914年）に中国福建省に行った時か、あるいは昭和11年（1936年）に上海に渡った時に入手して持ち帰った「武備誌」で、これが後に「沖縄伝武備誌」として伝えられたと推察される。

更に、福地清孝（1919～75年。存命中、沖縄剛柔流会会長）は、その師・比嘉世幸（1898～1966年）が、宮城長順の持つ原本から筆書きで写し取った写本を譲られ、所持しているという談話を載せている。

「精説沖縄空手道」によれば、茅元儀の書いた「武備誌」と、「沖縄伝武備誌」は内容的に全く異なる別物であるという。

前者は諸々の武術を取り扱う諸誌をもって編纂された一大兵法書であるのに対し、後者は福建少林白鶴門系（白鶴拳）を内容とする拳法書であると断定している。同じ書名ながら別の中身と性格を持つということは、誤解を招くばかりか驚きときり言いようがなく、何故かと詮索しようにも我々には想像外のことといえる。

「白鶴拳」(はっかくけん)とは、清朝康熙年間(1662～1722年)に生まれた福建少林寺の僧で、「少林十八羅漢拳」の使い手であった方慧石(ほうけいせき)の娘、方七娘(ほうしちじょ)によって創始された拳法である。方慧石、方七娘共に生没年を含め不明のところが多い。

「沖縄伝武備誌」については、昭和61年(1986年)ベースボールマガジン社から翻訳・大塚忠彦(1940～2012年。楊名時門下・東京都武術太極拳連盟理事長、市川素水門下・剛柔拳舎空手道連盟会長)、監修・楊名時(1924年～2005年。楊名時八段錦・太極拳師家)による「沖縄伝武備誌」(全文訳書)が出版されているから、詳細を調べたい方は一読されるとよい。また、有名な「拳法之大要八句」も、この「沖縄伝武備誌」に記載されている。これら「拳法八句」について、解説は後日に譲りたい。

拳 法 之 大 要 八 句	
人心同天地	人心は、天地に同じ。
血脈似日月	血脈は、日月に似たり。
法剛柔吞吐	法は、剛柔を吞吐(どんと)す。
身隨時応変	身は、隨時応変す。
手逢空則入	手は、空に逢えば、則(すなわ)ち入る。
碼進退離逢	進退は、碼(はか)りて、離逢(りほう)す。
目要觀四方	目は、四向(しほう)を觀ることを要す。
耳能聽听八方	耳は、能(よ)く八方を聽听(ちょうきん)す。

「此八句者拳之的要也)」 (この八句は、拳法の要点である)

その中に、「拳法四十八勢図」というのがあるので、以下、最初と最後の四図を参考に供するので、「八鶴拳」の特徴と共に、現代に通じる組手技との関連を考究されるのも一助になるかもしれない。

(つづく)

第二圖



白猿が相手の急所を葉子を盗むが如く、そつとねらつて行かんとするも、黒虎が洞から出欄する如く手、下段にあつて飛び来るを待ちうける懸符の構えに対しては、勝つ事が出来ないと説いています。

第一圖



相手が千斤の重みを持つが如く、手を下段に墜している無構えの手に、鐘鼓を片ち鳴らすが如き手で衝突して攻め立てれば即ち計られると説いています。

第四圖



孩児（小児）が蓮を抱くが如き様にて、相手に抱きつけば將軍即ち、力のあるものは卵（願）を抱いて是をひねってしまい、一敗を喫すると説いています。

第三圖



水を撥いて魚を求める手（相手をつかまへんとして双手を用いてくる手）は、瞬間、地面に手をついて双足で交剪の手（足）で刈られてしまい、一敗地にまみれると説いています。

第四十六図

仲狭行手勝

出戦機手敗

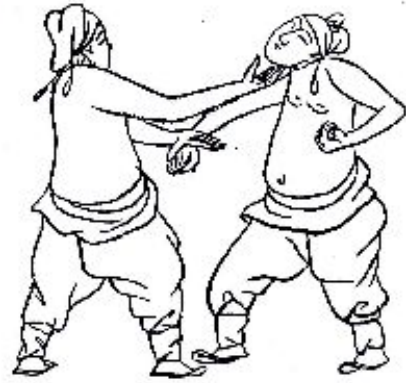


出戦の機を逃がすと、ふとかわされてあたかも深が手を伸ばし、つかまんとする背手（ムチ手）の奇襲攻撃を許してしまうと説いています。

第四十五図

左右翼手勝

前後反手敗



下から上へ（前・後と同じ翼）反手（釣拳）を打たんとするとき、鶴の翼手で肘を割せられると、手の自由を失い敗手となると説いています。

第四十八図

十字打手敗

獨掌鼎手勝



開休となった十字打手は、間合をつめる事によって一重にならない為、先に直線的になった獨掌鼎手の間合と間の取り方に屈してしまうと説いています。

第四十七図

化鉄牛手勝

存節度手敗



存節度手（思い切った攻撃技をしかけきれなければ）相手は化鉄牛の手と変化し、反撃をされ、敗手となる由その間と間合の切れをゆるがせにしない様に説いています。